RAYMOND CHANDLER'S

PHILIP MARLOWE

フィリップ・マーロウの事件

バイロン・プライス編／稲葉明雄・他一訳

II

1950—1959

RAYMOND CHANDLER'S

PHILIP MARLOWE

フィリップ・マーロウの事件

バイロン・プライス編／稲葉明雄・他＝訳

II

1950—1959

Hayakawa Novels

検　印
廃　止

フィリップ・マーロウの事件 II
1950—1959

1990年 2 月28日　初版発行
1990年 3 月31日　再版発行

編　者　バイロン・プライス
訳　者　稲葉明雄・他
発行者　早　川　浩

発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町2—2
電話　東京(252)3111(大代表)
振替　東京・6-47799

印刷所　三松堂印刷株式会社
製本所　大口製本印刷株式会社

ISBN4-15-207678-X C0097
Printed and bound in Japan

フィリップ・マーロウの事件 II

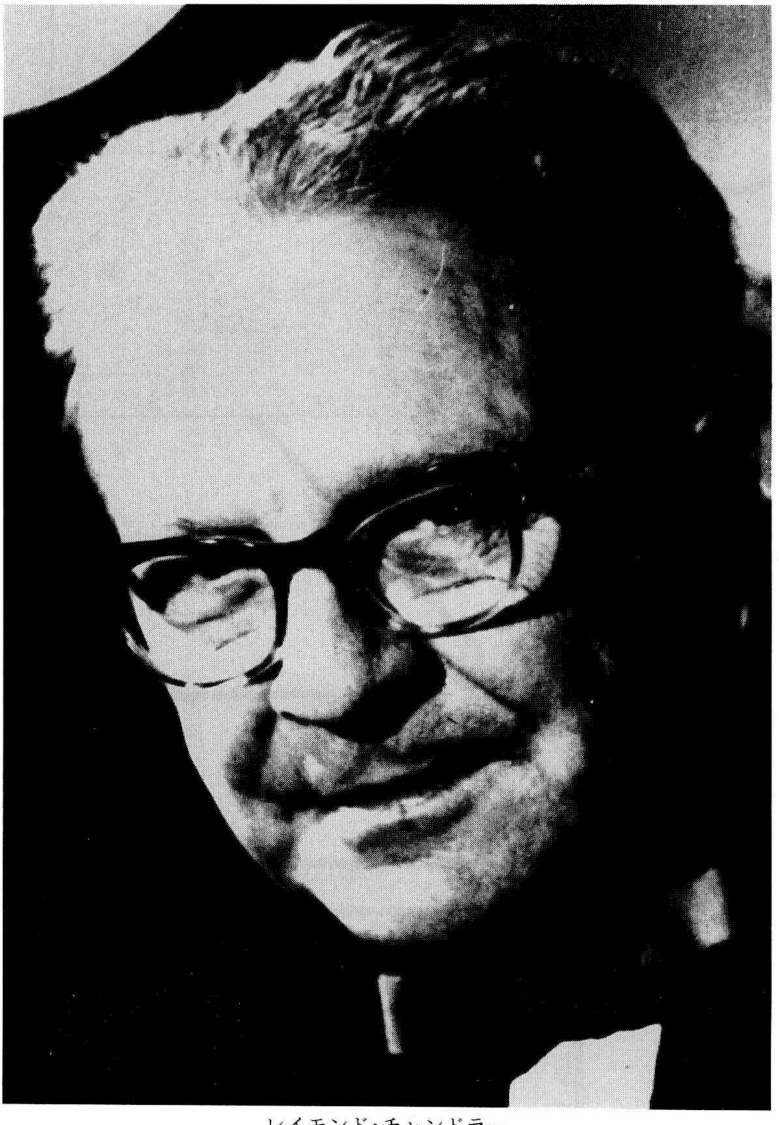
1950—1959

日本語版翻訳権独占
早 川 書 房
© 1990 Hayakawa Publishing, Inc.

RAYMOND CHANDLER'S PHILIP MARLOWE
A CENTENNIAL CELEBRATION

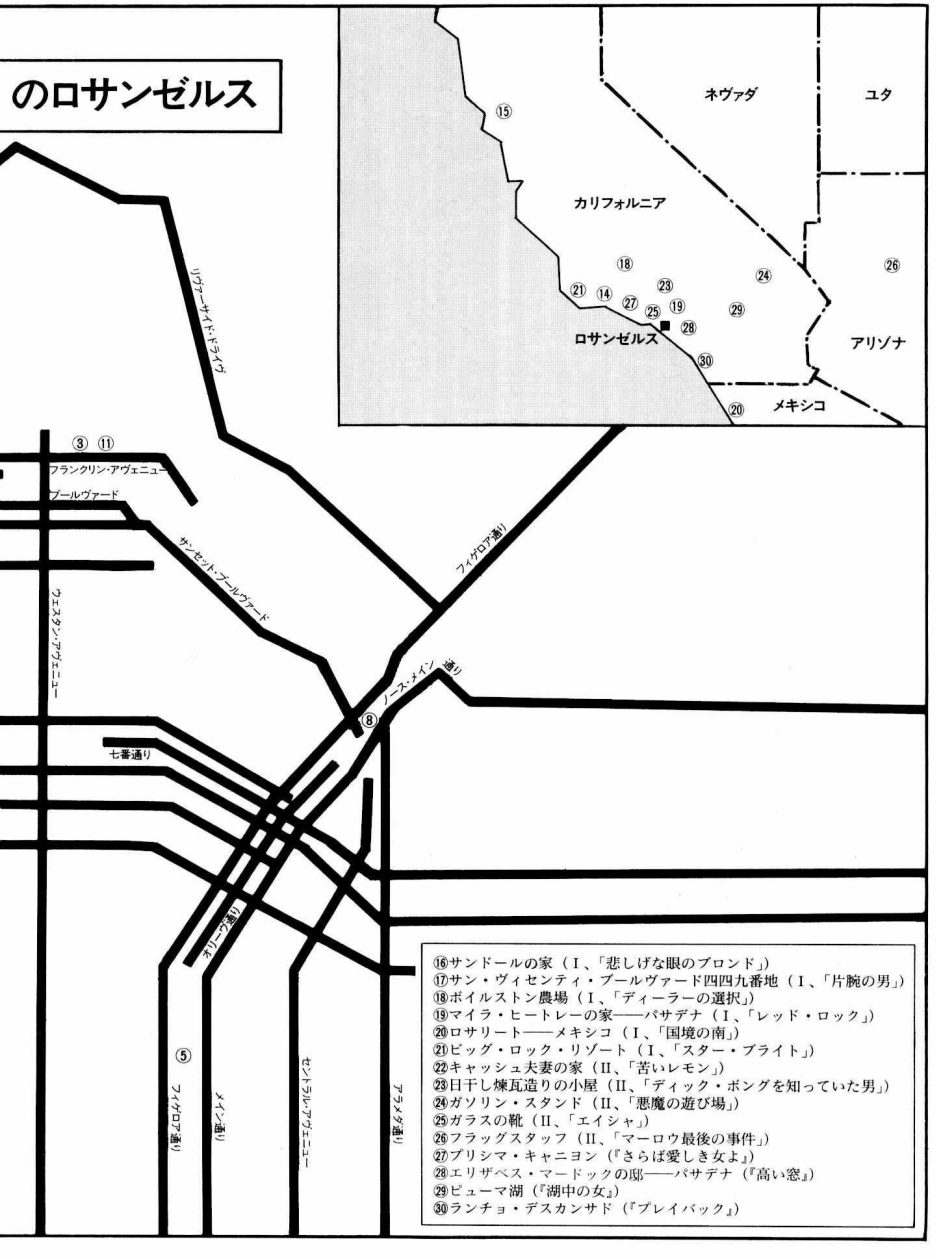
Edited by Byron Preiss
Copyright © 1988
by Byron Preiss Visual Publications, Inc.
Introduction copyright © 1988
by Frank MacShane
Individual stories copyright © 1988
by Simon Brett, Robert Campbell, Max Allan Collins,
Robert Crais, Loren D. Estleman, Ed Gorman, James Grady,
Joyce Harrington, Jeremiah Healy, Edward D. Hoch,
Stuart M. Kaminsky, Dick Lochte, John Lutz, Francis M. Nevins, Jr.,
Sara Paretsky, W. R. Philbrick, Robert J. Randisi,
Benjamin M. Schutz, Roger L. Simon, Julie Smith,
Paco Ignacio Taibo II, Jonathan Valin,
and Eric Van Lustbader respectively.
"The Pencil" by Raymond Chandler
Copyright © 1971
by Helga Green, executrix, estate of Raymond Chandler.
First published 1990 in Japan
by HAYAKAWA PUBLISHING, INC.
This book is published in Japan
by arrangement with ED VICTOR LTD.
through TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



レイモンド・チャンドラー
Photograph by Douglas Glass
arranged through Ed Victor Ltd
© Hayakawa Publishing, Inc.

のロサンゼルス



⑯サンドールの家（Ⅰ、「悲しげな眼のブロンド」）
⑰サン・ヴィセンティ・ブールヴァード四四九番地（Ⅰ、「片腕の男」）
⑱ボイルストン農場（Ⅰ、「ディーラーの選択」）
⑲マイラ・ヒートレーの家――パサデナ（Ⅰ、「レッド・ロック」）
⑳ロサリート――メキシコ（Ⅰ、「国境の南」）
㉑ビッグ・ロック・リゾート（Ⅰ、「スター・ブライト」）
㉒キャッシュ夫妻の家（Ⅱ、「苦いレモン」）
㉓日干し煉瓦造りの小屋（Ⅱ、「ディック・ボングを知っていた男」）
㉔ガソリン・スタンド（Ⅱ、「悪魔の遊び場」）
㉕ガラスの靴（Ⅱ、「エイシャ」）
㉖フラッグスタッフ（Ⅱ、「マーロウ最後の事件」）
㉗プリシマ・キャニヨン（『さらば愛しき女よ』）
㉘エリザベス・マードックの邸――パサデナ（『高い窓』）
㉙ピューマ湖（『湖中の女』）
㉚ランチョ・デスカンサド（『プレイバック』）

フィリップ・マーロウ

①マーロウのオフィス――ハリウッド・ブールヴァードのカヘンガ・ビル615号室
②マーロウの住居――ユッカ・アヴェニュー（『長いお別れ』）
③マーロウの住居――ホバート・アームズ館（Ⅰ、「黒い瞳のブロンド」）
④マンモス映画（Ⅰ、「ガン・ミュージック」）
⑤オリンピック競技場（Ⅰ、「マリブのタッグ・チーム」）
⑥MGM映画のエディーのオフィス（Ⅰ、「街はジャングル」）
⑦スターダスト・クラブ――ベイ・シティ（Ⅱ、「スターダスト・クラブの殺人」）
⑧ギャラクシー真珠（Ⅱ、「東洋の精」）
⑨コーヒー・ショップ（Ⅱ、「職務遂行中に」）
⑩ハリウッドの高級ホテル（Ⅱ、「アリバイ」）
⑪ベニーとミニーの住み込んでいる家（Ⅱ、「鼠たち」）
⑫アーサー・グウィン・ガイガーの家（『大いなる眠り』）
⑬メイヴィス・ウェルドのアパートメント（『かわいい女』）
⑭ドロレス・ドッドのサイドウォーク・カフェ（Ⅰ、「完全犯罪」）
⑮マーロウの生まれた町サンタ・ローザ（Ⅰ、「グレースをさがせ」）

装幀／辰巳四郎

目次

1950
スターダスト・クラブの殺人　サイモン・ブレット／嵯峨静江訳　11
1951
ロッカー246　ロバート・J・ランディージ／菊地よしみ訳　35
1952
苦いレモン　スチュアート・M・カミンスキー／木村仁良訳　53
1953
ディック・ボングを知っていた男　ロバート・クレイス／鈴木啓子訳　79
1954
東洋の精　エドワード・D・ホック／木村仁良訳　115
1955
職務遂行中に　ジェレマイア・ヒーリイ／菊地よしみ訳　137
1956
アリバイ　エド・ゴーマン／大井良純訳　169

1957
悪魔の遊び場　ジェイムズ・グレイディ／木村仁良訳　191
1958
エイシャ　エリック・ヴァン・ラストベイダー／真崎義博訳　223
1959
鼠たち　ロバート・キャンベル／石田善彦訳　243
マーロウ最後の事件　レイモンド・チャンドラー／稲葉明雄訳　263
作家紹介　319

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1950年代

1950

サイモン・ブレット

スターダスト・クラブの殺人

Stardust Kill

嵯峨静江＝訳

その家はマリブーにあり、バックにはビーチと海だけが一面にひろがっていた。平屋根の白いバンガローが、照りつける熱い太陽の下で、溶け流れたアイスクリームみたいに見えた。テラコッタのタイル屋根は、無意味でごてごてした金属の装飾でふちどられている。いわれのある古めかしい家に見せようとして、失敗していた。金にあかせて建てられた豪奢な新築の家だった――にわか成金のための。

高く築かれた白い壁のなかにある門は、他のごてごてした鉄の飾りよりは、いくらかまともな用途と機能を備えていた。この門は、歓迎されざる客を威圧的に拒絶していた。呼出しブザーにこたえて出てきた日本人のハウスボーイは、訪問客に自分は歓迎されていないと感じさせる態度をとるよう、しつけられていた。私は名刺をさしだした。「ミス・ウェストと約束しています」

門をあけながら、彼は顔をしかめた。私を案内して、さらにごちゃごちゃと金属で飾りたてた玄関のドアをあけ、なかのうす暗い廊下を歩いていくあいだじゅうも、彼はずっとしかめっ面をしていた。つぎのドアがあくと、とたんに私は真昼のサンポーチの明るさのなかにほうり出され、あまりのまぶしさに、別れ際の彼のひと睨みを、もうすこしで見そこなうところだった。彼はきわめつけのしかめ

っ面を、この瞬間まで大事にとっておいたらしかった。

明るい陽差しに急いで目を慣らすと、私は長椅子に寝そべっている赤毛の女に焦点を合わせた。彼女は造形の神の見事な傑作だった。これは男ならば、だれしもがいだく感想にちがいない。たいがいの男たちがそのことを口にだして彼女に言ったのだろう。彼女の顔には自信たっぷりなすました表情がうかんでいた。そんな気どった表情をべつにすると、その顔には、まっすぐにのびた濃い眉、こづくりな鼻、さきの尖がったあご、法王ですら四旬節の行をやめてしまいそうなほど、ふっくらと愛らしい唇が、それぞれに配列よくならんでいた。そしてその目は、オリーヴの実のように黒くつぶらで、法王がヴァチカンの富を値踏みさせかねないほどに、妖しく魅惑的だった。彼女はシルクのラウンジローブをまとっていたが、その下には、水平線へといざなう海に飛び込むための、最小限の衣類しか身につけていなかった。

日本人のハウスボーイは、しかめっ面に精力を使い果たしたあと、最後の気力をふりしぼって、私の名刺をなんとか彼女に手わたした。彼女はそれを吹き飛んでしまいそうな灰の塊りかなにかのように、そうっと爪のさきでつまんだ。「ミスター・マーロウ」その声は、枕から半径六インチより遠くへは、とどくことを意図されたものではなかった。言葉には強いスペイン語訛りがあった。

私は飾りぶさのついた低いソファーにすわり、かたわらに帽子をおいた。「どうやら思いだしてもらえたようですね。その名刺が役にたちましたか?」

「ええ」神は彼女の容姿に凝りすぎたあまり、ユーモアを解する脳味噌を入れ忘れたようだった。

「あなたにたのみたい仕事があるわ」彼女はいきなり用件をきりだした。

私はなにもこたえなかった。

「わたしがだれか、もちろんおわかりのはずよね、マーロウさん」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com